

ワイド特集

花の
さかりは過ぎに
けれども

とは言うまでもない。批判を浴びた稲田議員は言う。「助成金の妥当性を議論したいので、映画を見せて下さい」と言っただけです。日本芸術文化振興会は、「靖国」についてきちんと審議もしていなければ、議事録もない。公開して大いに議論すべきです」

国会議員が税金の使い道をチェックするのは当然のことだ。

新右翼「一水会」最高顧問の鈴木邦男氏も、「映画を見ないで、上映するなという右翼陣営のやり方はよくない。映画の上映を封殺するのではなく、見た上で、間違った歴史観なり、問題点を突いていくことが肝心だと思いますね」

現役最後の仕事

今年の香港国際映画祭で最優秀ドキュメンタリー賞を受賞した李監督はまさに「受難のヒーロー」。しかし、その撮影手法には疑義も呈されている。

3月27日の参議院内閣委員会で、自民党の有村治子議員は、『靖国』に出演した

映画『靖国 YASUKUNI』の上映中止が相次ぎ、表現の自由の危機が声高に叫ばれている。今や李



李監督(左)。宣伝用写真の男性は自衛官

10 今や受難のヒーロー 反日映画『靖国』に出演者の刀匠もダマされていた

櫻監督(44)は「受難のヒーロー」扱いだだが、メイン出演者の刀匠は、ダマされて撮られたのも同然なのだ。

多くの新聞や言論人が、上映中止を招いたのは、『靖国』を「反日映画」と報じてそのキッカケを作った本誌と、公開前に試写を求めた自民党の稲田朋美議員に責任があると糾弾している。だが、最も問題なのは劇場などを威迫した輩であり、『靖国』への助成金を看過した文化庁の役人であるこ

刈谷直治氏(90)についてこんな事実を明かした。

「刈谷さんは、美術品として純粹に靖国刀匠のドキュメンタリーを撮りたいという若い中国人の青年の申し出に、刀をつくる自らの映像を撮影することを承諾されました」

現役最後の仕事になると覚悟を決めた刈谷氏は、李監督らが回すカメラの前で一心不乱に熱い鉄を打った。製作途中の映像を見せられると、小泉元総理の参拝や終戦記念日の境内の喧騒と自分の映像が交錯して使われている。刈谷氏は違和感を覚え、監督に不安と異論を唱えたという。

「刈谷さんの自宅に赴いた李監督と助監督は、この映画には日本の助成金が出ているから大丈夫ですとなだめました。刈谷さんは嫌がり、自分の映像を一切外

してほしいと希望されています」(有村議員)

刈谷氏はキャストになることを承諾せず、完成した映画を見る機会さえ与えられていないという。

「靖国」の配給協力・宣伝を担当するアルゴ・ピクチャーズからの反論。

「李監督と助監督が、刈谷さん宅にうかがいがい、映画を直接見せております。刈谷さんご自身も、すごく良かった」と、喜んでいたら聞いております」

刈谷氏に尋ねると、代わって夫人がこう語った。

「一度、ビデオを持ってきたので、見ましたが、主人が当初考えていた映画とは違って、その後は誰とも会いたがらなくなりました」

この騒ぎで新たに上映を決めた劇場も増えている。結局は「映画の宣伝」になっただけなのだ。